

# 乳幼児の保育における保育者の主体性のとらえ方

—保育者のインタビュー調査を中心に—

How to understand the independence in childcare practice:  
Based on interview survey to Nursery teacher

池田 純子

Junko IKEDA

子ども主体の保育を行なうためには保育者も主体的でなければならないということを前提に考えてきたが、保育者が主体的であるためにはチームで保育をすることについての保育者の意識が重要であることがわかった。そこで、チームで保育することと保育者の主体性について調査をした。チームで保育することと保育者の主体性は密接に関連していることが明らかとなった。

キーワード：保育者の主体性 子ども主体性 チーム保育 乳幼児の造形表現

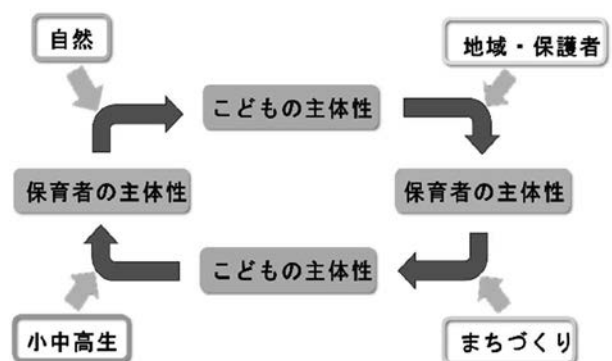
## 1. はじめに

子ども主体の保育という観点は定着してきたと考えられるが、乳幼児の保育に携わる保育者の主体性については研究が少なく、子どもと保育者が共に主体という「共主体」という考え方にとどまっている。共主体のうちの保育者の主体性について考えることは、子どもの主体性及び主体的な保育につながると言える。子どもの主体性を考えるとき、子どもと生活を共にして人を育てる基本を担う保育者が、子どもたちがどのように育って欲しいと考えているのか、そのためにどのような保育をしようと考えているのかという保育者の主体性が大きく影響するからである。保育所の保育士に予備調査を行なった結果、保育者の主体性を考えるためには、保育者の意識、特にチームで保育するときの保育者の意識が関与することがわかった。チームで保育をするときにどのような意識が働き、それが保育者の主体性にどのように関与するのかを分析することにより、保育者が主体性を持ち、保育に望むための要件を探る一考としたい。

## 2. これまでの研究について

筆者は子どもの主体性と保育者の主体性について研究を進めてきた。2024 年 3 月 2 日の第 46 回美術科教育学会において「乳幼児の造形表現活動における保育者の主体性のとらえ方—保育士の意識調査から—」<sup>1)</sup>を

発表した。ここでは、乳幼児の造形表現活動時に保育者の主体性がどのように発揮されるかを解明するための第一段階として、保育者自身の主体性があるという仮説（図－1）に対しての知見を得るために、保育者自身の主体性について具体的な意識調査を行なった。その結果、保育士たちには「保育者の主体性」という言葉が浸透していないこと、はっきりとした定義がないことでどう捉えていいのかわからないことが明らかとなった。また、「保育所の保育はチームですものだから自分の主体性を強く出すことは好ましくない」というやや否定的な意見と「子どもとともに取り組むという保育者の思いや願い、気持ちを持つことはいいことだと思う」という肯定的な意見に二分された。チームで保育をすることが大きな影響を及ぼしていることが明らかとなったことから、チーム保育についての調査が必要であるということが導き出された。



図－1 子どもの主体性と保育者の主体性の概念図

### 3. 研究の目的と方法

#### (1) 研究の目的

以上のことから、本研究では保育者の主体性を考える時に保育者のチーム保育についての考え方やとらえ方が重要な要素を占めることに焦点をあて、聞き取り調査により保育者の主体性にチーム保育が及ぼす影響及び保育者の主体性が現われる場面の検討を目的とする。

#### (2) 研究の方法

インタビュー調査と保育者の保育の振り返りをもとにした保育カンファレンスの形態で行なう。保育園の園長、子ども園の園長、2園の保育士に対するインタビュー調査を行ないチームで保育をすることへの考え方や意識していることを聞き取りした。また、子ども主体の保育をする中で保育者としてどのように保育をすることを意識しているのかを事例を通してカンファレンスを行なった。本研究のためのインタビュー調査については「人を対象とする研究に関する同意書」を作成し、承諾を得た。

### 4. チーム保育についての調査と考察

【調査1】認可保育園の園長の聞き取り

【調査2】認定こども園の園長の聞き取り

【調査3】認可保育園保育士からの聞き取り  
(乳児・幼児)

【調査4】認可保育園保育士の主体的な保育について  
の聞き取り (0歳児・2歳児・3歳児)

#### 【調査1】

対象：東京都内認可保育園園長

場所・時期：2024年5月保育園の職員室

聞き取り内容：チーム保育についての見解

・保育所保育指針にあるように、保育所保育はチームであることが基本なので、チーム間での情報共有や保育に関する話し合いの時間を義務づけている。そのことが保育の質の向上につながると考えているし、保育者たちからは必要な時間との意見が多い。子どもたちを安全に保育するためにも必要なことであると考えている。保育者一人一人がやりたいことを主体的に行なうことについても自由にできるような環境は整えている。保育者がチームの保育者に相談しながら保育内容を考えることはごく普通のことだと思う。意思疎通が図ら

れなければ、活動がスムーズに進まないし、造形活動の場合は特に準備や分担を決めておくことが重要になるので保育者たちは予想に沿ってチーム内での役割を相談している。そのことと保育者が主体性をもって保育することは並行できると思う。

#### 考察

保育所保育指針解説<sup>2)</sup>では、組織的な取り組みとして「保育の質の向上のための課題を把握した上で、それを保育所全体で共有する。その上で課題への対応は職員がそれぞれの専門性を生かし、協働で行なう。」「職員一人一人が保育所全体としての目標を共有しながら協働するチームとなって保育に当る」保育所保育指針第5章1(2)とある。園長が保育所はチームで保育をすることが基本と述べている根拠はここにあると考えられる。保育所保育はチームで行なうことが基本となるのは、乳幼児を集団で保育していることと保育士の配置基準が定められていることである。また、チームで保育をする上では保育内容及び子どもたちの姿等の共有は欠かせない。馬場<sup>3)</sup>まとめておいるようにチーム保育は2001年に幼児教育振興プログラムによってきめ細やかな保育を追求する観点から推奨されている。チーム保育の保育形態の特徴は「複数の保育者が共同で子どもの保育を行なう点である。」<sup>4)</sup>と、梅田<sup>4)</sup>は述べており、松村<sup>5)</sup>は、「チーム保育は時代の要請であり、現場での取り組みを文部科学省が後押しした」と分析している。池田<sup>6)</sup>は「保育者間で共通理解を図り、連携して保育を進めていくことが大切である。」と保育者同士の共通理解がチーム保育において重要な成立原理であるとしている。馬場<sup>3)</sup>は「現場の保育者からは、相手と自分の保育の仕方が違う、チームワークがかみ合わずちぐはぐになる等の感想が聞かれ、協働関係の難しさや課題も多い。」「それぞれ異なる独自の経験や思想を持つ各保育者がチームを組んで保育実践を行なうことは簡単ではない。」と指摘している。それぞれ異なる独自の経験や思想を持つ各保育者がチームを組んで保育実践を行なうことは簡単ではないが、だからこそ、それぞれが主体性を持ち保育をすることが望ましいと考えている。園長の述べるチームで保育すること保育者が主体性をもって保育することは並行できると思うということについては、本研究の根幹に関わることで短絡的に考えられることなく改めて聞き取りをして内容の精査が必要である。

## 【調査 2】

対象：千葉県 Y 市認定こども園の園長

場所・時期：2024 年 6 月保育園の職員室

聞き取り内容：チーム保育についての見解

- ・こども園なので、乳児（0 歳～2 歳児）はチーム保育、幼児（3～5 歳児）は単独担任。

幼児も配慮の必要な園児が多いため、加配の保育者と副担任としての保育者は配置している。しかし、幼児の担任保育者は基本的に一人での保育の形態となっている。

- ・園長として、担当を決めるときに大変に悩むことがあり、それがチーム保育に向いているか単独のほうが力を発揮できるかを見極めである。模索しながら、毎年の担任を決めているのが実情。チームの人員の組み合わせにもよるし、その年の保育者の個人的な事情もある。

今年度の 5 歳児の担任の 1 名は、単独担任で力を発揮していると思う。昨年度は 1 歳児でチーム保育をしていたが、なかなか自分の意見を言わないように見受けられた。今年度は加配の保育者は 2 名いるものの、自分で主体的に保育をしている姿がある。主体的とは、自分でやりたいことを行なうと言うより、子どもへの寄り添い方や活動のペースを子どもたちに合わせて加減している様子が見られる。その場その場での判断が求められることが多いのが保育であるが、その決断を柔軟に行なっているように思われる。伸び伸びと保育しているなど今年は感じている。この保育者はたぶん、一人担任に向いているのではないかと考えている。「この采配が難しいですね」とのこと。もちろん、保育者の希望も毎年、聞いているということであった。

## 考察

園長の捉えている、「5 歳児の担任の 1 名は、単独担任で力を発揮している」については、実際に保育参観をしたので、同じような感想を持った。子どもたちへの援助や言葉かけが適切であり、子どもたちへの活動の提案や子ども一人一人のやりたいことへの配慮が見てとれた。発達に課題のある子どもと砂場で遊ぶ際の援助では特に顕著であった。これは多分に主観であることを差し引いても、3 年目の保育教諭として落ち着いて 5 歳児にふさわしい保育実践を展開していた。野澤<sup>7)</sup>によれば、「保育者の能力は、単に時間の経過と関係するものではない。」とされており、保育者自身に備わった資質・能力と学びの機会によるもので園長等のリーダーによる外部評価も大きく影響すると述べ

られている。このことから考えると、5 歳児担任の保育者は園長からの期待も受け止めて主体的な保育を展開していると推察される。

## 【調査 3】

対象：東京都内認可保育所保育士（乳児担当）

東京都内認可保育所保育士（幼児担当）

場所・時期：2024 年 5 月保育園の職員室

聞き取り内容：チーム保育についての見解

## 乳児担当

- ・チームで保育をしているので、計画を立てる時点で相談をしている。また、保育中に活動の内容や方向を変えるときには、口頭で確認をするようにしている。「こうしようと思うがどうだろう?」「こうしようと思いますので、よろしくお願いします。」というような言葉で確認をするようにしている。特に造形活動を行う時には準備等も一緒に行なうため、方向変換の時には相談（その場での確認）をするようにしている。もちろん、反対されることはほとんどなく変えたことに協力して保育してくれる。だから、情報共有や相談は大切だと考えている。保育士が保育をしやすいということが結局は子どもたちのためになると思うし、子どもが主体的に活動することをその場その場で後押しできると思う。（とっさの判断で良い方向に展開できる）

## 幼児担当

- ・勤務園が幼児は一人担任（補助の保育士はいる）なので、計画も保育も基本的には一人で行なっている。計画を立てる時には副園長に相談したり、昨年、担任をしていた保育士に子どもたちの様子を聞いたりしている。年間の保育の様子は打ち合わせや生活展（1 年の保育の発表展示の場）で見るので、なんとなくはわかっている。保育中は補助の先生に必ず行なうことを伝える。それは、相談というより安全に保育を行なうための事前報告のようなものだと考えている。造形活動をするときも同じで、準備を手伝ってもらいながら流れの確認をしたりアドバイスをもらうこともある。複数名で保育をしているのだからあたり前のこと。もしも、チーム保育だとしたら、その都度、声をかけて確認をすると思う。



## 考察

「チームで保育をしているので、計画を立てる時点で相談をしている。また、保育中に活動の内容や方向を変えるときには、口頭で確認をするようにしている。」と乳児担当の保育士が答えている。この内容は前述の「現場の保育者からは、相手と自分の保育の仕方が違う、チームワークがかみ合わずちぐはぐになる」とはとらえ方が違っており、チームワークがかみ合わずちぐはぐになるのではなく、協力体制をとり安くするために相談をしていることがわかる。園の雰囲気や保育士の組み合わせも関わることであるので、断定はできないが、少なくともこの保育士は自分が主体的に判断して保育を進めるために、チームの保育士に確認をしていることは明らかである。また、子どもの最善の利益を図るという保育所保育指針にも通じる信念があることも見てとれる。

幼児担当の保育士は単独で計画や保育内容の変更も行えているので、子ども主体の保育をできていると思うと答えた。「複数名で保育をしているのだからあたり前のこと」という言葉が気になるところである。チームで保育をしているのだから相談はあたり前ということは理解できるが、保育士としての主体性についてはあまり考えたことがないと言っていたので、さらに聞き取りが必要と考えている。

## 【調査 4】

対象：東京都内認可保育所保育士（0 歳児担当）

東京都内認可保育所保育士（2 歳児担当）

東京都内認可保育所保育士（3 歳児担当）

場所・時期：2024 年 10 月保育園の保育室

（研修会後）

聞き取り内容：子ども主体の保育から考える保育士の主体的な保育について

## 0 歳児担当

・夏にプールに入れない子どもを担当している時、「あれあれ」とロビーを指さして自己主張してきた。初めての発語だったこととかなり強く主張してきたので、本来、0 歳児はロビーで遊んではいけない決まりだが、ロビーに連れて行った。ロビーにあるすべり台で遊びたかったことがすぐにわかった。まずはやらせてあげたいと思い、やってみた。もちろん援助は必要だったが満たされた表情で嬉しさが伝わってきた。その後、何度も遊ぶうちに他の 0 歳児も遊ぶようになり、取り合いになり順

番待ちになっている。初めて、0 歳児の主体性に会ったと感動した。保育が 1 年目（資格は持っていて、転職してきた）ということもあるが、赤ちゃんも能動的だということが体感としてわかった。プールに入れなかった子ども 1 人をみていたので自分にゆとりもあったと思う。0 歳児だからまだできないと思わないで何でもやらせてあげたいと思っている。やってみてよかったと思うし、「子どもが主体」と言われているのでできたことかもしれない。

## 2 歳児担当

・色画用紙を使いたいと子どもたちが言ってきたので、色画用紙を選べるようにしようと考えた。時分がチームリーダーの日に、色画用紙が入っている棚で全色の中から選んで欲しかったので、子どもたちが選びやすいように棚の向きを変えてみた。今までは子どもたちが勝手に使わないようにするために手を出しにくい配置にしてあった。向きを変えて、子どもたちがゆっくりと選べるようにしたら、さっと色を決めて描き出す子、じっくりと選ぶ子、友達が選んだ色と同じ色にする子等、様々な姿が見られた。「白いクレヨンで描ける」「他の色も使ってみたい」「大好きなピンク色」と色画用紙に対する感想も話しながら描いていた。今後はリトミックの時にも選択肢が持てるようにしていきたいと考えている。子ども主体を考えて保育をしているつもりだが、保育士も主体的に動かなきゃと思った。棚の向きを変えただけでこんな風に見えるんだとわかったし、ちょっとしたことでいいんだなとも思った。

## 3 歳児担当

・9 月から産休代替でこのクラスの担当になった。（主任なのでクラス担任はしていなかった）3 歳児クラスのいいところ、伸ばしたいところを考えながら保育をしているところ。製作が好きな子どもが多い印象で、空き箱を出したり、半端になった紙を出したりと試している。選択肢を与えたいと思っているのでいろいろなものを出して、選べるようにしている。「やりたい」ことをやらせてあげたいので、まずは何がやりたいのかを子どもたち自身がわかるようにしていきたい。空き箱の数も徐々に増やしてみている。子どもたちが作ったもののへの保護者の扱いがぞんざいであることも気に

なっているので、保護者会で話す予定。多方面から取り組んで行かないと子どもの主体性は保てないと保育に入ってみて改めて思う。3歳児クラスを全面的に任されているので、思ったように保育している。

#### 考察

「保育士1年目だからかえっていろいろなことができるように思っている。」と0歳児担当の保育士は述べた。「まだ、人間関係も深くなっていないし」とも述べており、人間関係が深くなると気を遣って言い出せないこともあるということでもある。一人で一人の子どもをみていた時だったのでということも述べており、状況によって自分の思いを行動に起こせるときと起こせないときがあることも示唆される。しかし、この保育士は「まずはやらせてあげたいと思っている。」とはっきりと自分の意志を持ち、主体的に判断して子どもに対応している。「初めて、0歳児の主体性に出会ったと感動した。」と久保<sup>8)</sup>の述べる「主体性A：自分の中に様々な欲求（感情）が湧き出ること。いろいろなカラダの声が出てくること。選択肢が湧き出てくること。」の場面に出会っている。この主体性Aに対応するために保育士も主体性を発揮して本来、0歳児は行かないホールのすべり台に行き、遊んでいる。子どもの主体性と保育士の主体性が連動していることが見てとれる。

「色画用紙が入っている棚で全色の中から選んで欲しかったので、子どもたちが選びやすいように棚の向きを変えてみた。」2歳児担当の保育士のこの行動は、保育士の主体性が表れていると考えられる。子どもたちが主体性を発揮できるようにと考えての行動である。ここで注目したいのは、「自分がリーダーの日だったから」という点である。リーダーの日は自分の計画により自分が中心になって保育をするので、特に相談等はないでやってみたということであった。子どもに危険が及ばないことならば大丈夫だし「後から説明はしましたよ。」とも述べていた。チームで保育しているが、自分で責任をもって保育する場合はある程度は自分の考えに従って保育ができると捉えている。同僚も後から説明を受けてなるほどと理解を示す。チーム内での意思疎通がとれているからできることとも言える。大人も「主体性A」「主体性B」を持っていて、保育中に働かせているとも言える。

「何がやりたいのかを子どもたち自身がわかるようにしていきたい。」という言葉が印象的であった。子ども

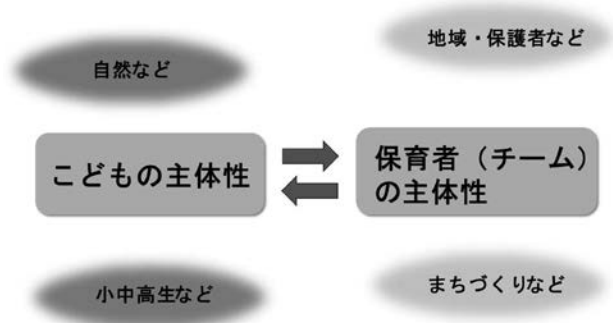
が主体的に遊ぶためには何がやりたいのかを自覚できるようになって欲しいということである。「やりたくない」「やってみたらおもしろい」ということも子どもたちの生活の中には多々ある。「やりたくない」「やってみたらおもしろい」も主体性の一部である。主任保育士の「多方面から取り組んで行かないと子どもの主体性は保てないと保育に入ってみて改めて思う。」という言葉は示唆に富んでおり、子どもの主体性を一方方向から捉えることの危険性や保育者の一方方向からの見立ての危うさを示す言葉である。このことは今後の課題として取り組みたい。また、図-1で示した保護者・地域は影響することも確認できた。

この園では、保育所保育指針の改定（訂）に伴い、「子ども主体の保育」を意識して保育士が保育を行なっている。意識すると自然と自分も主体的になると保育士たちは述べている。「保育者の主体性ということを意識はしていないが、子ども主体の保育は保育者も主体的になる保育ですよね。」という言葉が返ってきた。言葉にこだわることはないと言っているが、言葉を定義していく必要性を改めて認識した。

#### 5. まとめと今後の課題

チーム保育が保育者の主体性に及ぼす影響に関しては、園長の考え方が大きく反映されることが示唆された。保育士たちはチームで保育をするために保育の計画やねらい、保育内容をお互いに確認することで子ども主体の保育を行なっていることが改めてわかった。保育はチームであるものということと保育者の主体性について、保育者個人の考え方がチームの考え方として良いのかという新たな課題も見つかった。聞き取り調査の保育士の担当年齢にばらつきがあるため、各年齢担当の保育士への聞き取り、幼稚園教諭への聞き取りも行なっていく必要がある。また、チームで保育していても「子ども主体の保育は保育者も主体的になる保育」という現場の保育者の素直なとらえ方も分かり、研究していく上での大きな励みとなった。さらに、「保育者の主体性」については、保育者にわかりやすい言葉の定義をしていくことも今後の課題としたい。

まとめとして、保育者からの聞き取りを通して、「子どもの主体性と保育者の主体性の概念図」の修正を行なったものが図-2である。研究を進め、概念図の更新をしていきたい。



図－２ 子どもの主体性と保育者の主体性の概念図

## 参考文献

- 1) 池田純子「乳幼児の造形表現活動における保育者の主体性のとらえ方—保育士の意識調査から—」第46回美術科教育学会弘前大会 研究発表概要集 2024年 pp41
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館 2018
- 3) 馬場訓子「ティーム保育における共通理解に見る熟練・若手保育者の世代間相違」岡山大学大学院教育学研究科研究集録 第177号 2021 pp35-42
- 4) 梅田優子「チーム保育」森上史朗・柏女霊峰編 保育用語辞典 ミネルヴァ書房 2013 pp111
- 5) 松村和子「ティーム保育を考える—保育のパラダイム変換を促す方法—」文京学院大学紀要3 (1) 2001 pp13-26
- 6) 池田尚子「ティーム保育」小田豊・山崎晃監修 幼児学用語集 北大路書房 2013 pp130
- 7) 野澤祥子・淀川裕美・佐野早季子・天野美和子・宮田まり子・秋田喜代美「保育におけるミドルリーダーの役割に関する研究と展望」東京大学大学院研究科紀要 第58巻 2018 pp 387-415
- 8) 久保健太「主体性から理解する子どもの発達」中央法規出版 2024